

もはや「ノンフィルム」ではない

——映画図書館員会議に参加して

岡田秀則

Hidenori Okada

いまや映画の保存が映画作品そのものの問題だけではないことは、ハリウッドの中核、映画芸術科学アカデミー主催で初の「映画図書館員会議」が開かれたことが明らかにした。アカデミーは映画人にオスカーを授けるだけの団体ではない。これまで無数の技術の標準規格を定めてきた映画技術界の権威であり、世界最大級の映画資料館マーガレット・ヘリック図書館を擁する「紙の映画」界の一大拠点でもある。「映画を文書化する—21世紀の映画図書館員の職務」との副題が付されたこのイベントの到来は、映画資料の新たな価値化を目指す宣言とも見なせるだろう。

4月26日、アカデミーのピックフォード研究センターに集まった関係者は16か国の約140名。とはいってもその半数以上はアメリカ各地の図書館員であり、そのことはアメリカ映画にまつわる資料が広く全米の図書館に分有されていることを意味する。初日は、『ブルース・ブラザーズ』（1980年）などの喜劇の名手ジョン・ランディス監督による基調講演で始まった。ランディスは自身が映画資料の収集家であるばかりか、デボラ夫人も衣裳デザイナーとして活躍、まさに「紙の映画」の中を生きてきた人物である。自分と記念写真を撮ったファンが最近eBayでそれを売っているのを発見したエピソードなど、得意の笑いを織り交ぜながら最後には「ある監督の資料がほしいと思ったら、まずは手紙を書きなさい。ファンが書いても警戒されるだけだが、〇〇大学の図書館だと名乗れば話を聞いてくれる。皆さんは有利な立場にいる！」と資料の充実を志す図書館員たちを励ました。

続いてNBCユニバーサル、ディズニー、ピクサーという大手会社の社内保存資料の活用について、各社のアーカイブ担当者から発表がなされた。こうした企業における資料の活用は、展覧会、テーマパーク、マーケティングな



▲スペイン風ロマネスク建築のマーガレット・ヘリック図書館

ど主に各社自身の事業展開を目的としている。特に6,500万ものアートワークを所蔵するというディズニーのアニメーション研究図書館では「GEMS」(ジェムズ)というこの分野独自の資料群を管理する画像データベースを構築している。

一方でアメリカ国内の大学からは、実務に根差した活きのいい報告が相次いだ。アメリカ各地にある州立大学の図書館ではしばしば書籍・雑誌にこだわらない特別コレクションを構築しており、映画研究に力点を置く大学では映画資料の収集にも熱が入る。ワイオミング大学における映画系コレクションの充実ぶりは会場に強い印象を与え、デヴィッド・O・セルズニックやロバート・デ・ニーロの旧蔵資料を所有するテキサス大学からは、資料公開におけるプライバシー保護の問題が提起された。ただ、ニューヨーク大学の芸術学校においても映画資料はアーキビスト教育を受けていない非常勤スタッフのみで管理し、アクセスや公開の判断をしなければならぬという現状には、各大学から「弁護士がいる企業アーカイブが羨ましい」との声も聞かれた。

二日目は映画資料を用いた研究リソースの構築が主なテーマとなり、欧州からの発表者も相次いだ。映画史家デイヴィッド・ピアス氏(本誌46-47号「罪びとの群れ—アメリカの無声映画が消えた理由」の著者)が率いる「メディア史デジタル図書館」、欧州24か国38の映画アーカイブが参加するポータル「ヨーロッパ・フィルム・ゲートウェイ」、ウェブ上の情報に特化したサンフランシスコの「インターネット・アーカイブ」における200万アイテムに及ぶ動画の公開、FIAFが長年構築してきた映画雑誌インデックスなどが紹介された。

ピアス氏によれば、180万頁の本と雑誌からなる「メディア史デジタル図書館」の背景として、アメリカではマイクロフィルム化を済ませた雑誌を売却する館も多く、現物を保持する館は減少したが、1923年から1963年までの言語著作物は更新手続きを行わないとパブリック・ドメインに移行するため、多くの雑誌のデジタル化と公開が可能になっているという。そして同氏は、有効なリソースを築くには情熱、著作権、資金面でのパートナー、連携組織の四つが大切だと述べ、「著作権は友人にもなり

得る」との名言も導かれた。

フランスからはシネマテーク・フランセーズと国立映画映像センターの共同発表として新しい情報システムが紹介されたが、それ以上にこの日いちばんの話題は、ロンドンの英国映画協会(BFI)における図書館のリニューアルであった。大規模な予算投下のもと、データ・インフラの近代化を猛スピードで実行して2013年にはコレクション検索を可能にし、デザインやゾーニングに配慮した新図書館が来室者数(リニューアル前の600%!)や満足度において大成功を収めているという報告は、参加者から驚きを持って迎えられた。

スペイン風のロマネスク建築に収まった、アカデミーのマーガレット・ヘリック図書館についても述べておきたい。アメリカの映画産業、スター、監督たちなどの資金も得ながら維持され、推定1000万枚を超える写真資料のほか、特別コレクション(映画人資料)、グラフィック・アート資料(ポスターなど)、書籍なども所蔵する同館は、一般への閲覧体制を整えつつ、グラフィック・アート部門では修復も内部で手がけており、近年はデジタル・コレクションの公開にも力を入れている。写真部門キュレーターのマット・シーヴァーソン氏によれば、収蔵品の多くはアメリカ映画産業に由来するものの、他にロッテ・ライニガーの影絵映画の切り抜き、初期の女性監督アリス・ギイ直筆の回想文、ポーランドやソビエトの映画ポスター、ルドルフ・マテ旧蔵「裁かるゝジャンヌ」セット写真、シアヌーク殿下から寄贈を受けたカンボジア映画のプレス資料、宮武東洋の撮影したアメリカの日系映画館の記録写真などがあり、国際性においても注目すべきコレクションである。

それにしても、ここでは「ノンフィルム」という語を聞かなかった。その代わりに使われたのが「紙媒体の(paper-based)資料」という素材本位の言い方だ。それは、参加者の多数派が映画専門の資料館員ではなく、「フィルム以外」という概念があまり実効的ではないからだ。映画資料の現状を捉えるには映画アーカイブの外部も広く眺めねばならない以上、日本でようやく使われ始めた「ノンフィルム」という語も、早くも不要になり始めているのかも知れない。

(フィルムセンター主任研究員)